体力・気力をふりしぼり、闘いぬこう

高連協及び交流集会

3月13日から14日にかけて、部落解放第27回高齢者交流集会及び部落解放和歌山県高齢者連絡協議会第26回総会を淡路島の洲本温泉でひらき、14支部41人の参加があった。

あいさつする竹井輝夫・高連協会長

1日目は、小雨というあいにくの天気であったが、貸切バスで高速道路をひた走り、淡路ハイウェイオアシス「みけ家」で昼食をとったあと、たこせんべいの里に立ち寄り、各自大量のせんべいを購入したあと、宿泊する「ホテルニューアワジ」に到着した。到着後、礒岡和也・生活福祉運動部員の司会のもと、高連協第26回総会をひらき、中井喜美子・高連協副会長が水平社宣言朗読をおこなった。竹井輝夫・高連協会長から「体力・気力の限界と相撲取りが引退のときにいうが、同じ気分だ。しかし、こうした運動は死ぬまでがんばっていかなければならない。「推進法」が昨年施行されたが、法律や規則で差別がすべてなくなるわけではないので、日々の運動をこれからもがんばっていかなければならない」と主催者あいさつした。つづいて、辻岡龍閣・執行委員から「昨年から執行委員になって、生活福祉運動部の担当になり、バスのなかも楽しく初めて交流集会に参加させてもらった。会長のあいさつにもあったが「推進法」が昨年12月に成立した。これも東京で開催された「人権フォーラム」がきっかけとなって「法」制定につながってきたことは、ふまえておかなければならない」と県連代表あいさつをうけた。

野島断層保存館で、断層をそのまま保存

北淡震災記念公園で

千年一酒造で

経過報告を金本清春・副会長、運動方針の提案を吉田雪子・副会長、2016年度の役員改選をおこなったあと、総会宣言を新役員の細川健次郎・副会長がおこない、清水節子・副会長の閉会あいさつで総会をおえた。夜には、食材の宝庫といわれる淡路島のさまざまな料理に舌鼓をうちながら、自慢の美声を披露するカラオケタイムに突入すると、歌えや踊れやの楽しい宴を満喫し、1日目を終えてきた。

2日目は、淡路人形座で人形浄瑠璃を鑑賞したあと、北淡震災記念公園で昼食をとったあと、国指定天然記念物野島断層の保存館を見学した。震災の爪痕が生々しい断層をそのまま保存しており、当時の住宅もそのままの状態で見学ができ、実際の震度がどのようなものであったか体験できる施設もあり、参加者がさまざまな思いを抱えながら見学してきた。最後に、千年一酒造の見学をおこなって帰途についた。

主張

「部落差別解消推進法」の積極的な活用をすすめよう

4月18日、早朝から自由民主党本部で、部落問題にかかわる小委員会か再開された。部落解放同盟からは西島藤彦・中央書記長、大西聡・中執、和歌山県連から藤本哲史・執行委員長、宮本修作・書記長が傍聴に参加した。

この小委員会では、法律が制定され各省のとりくみがどうなっているのかが焦点となった。この小委員会に出席した各省庁は法務省・総務省・文科省・厚労省の4省であった。

法務省では実態調査にかかわっての報告がなされ、今後手法をふくめ、検討していくことが提案された。また、総務省では「鳥取ループ・示現舎」などによるインターネットの差別事件への業界での防護策が検討され、文科省は教育現場での差別事件の集約をどうしていくのか。厚労省では部落差別の収集については隣保館の存在が鍵となるとの報告がなされた。また、出席した議員からは事業面とりわけ差別を解消していくための財源もふくめ検討していくべきだとの意見などがだされた。

和歌山県内においても法制定をうけて、和歌山県連と県行政（人権局）との勉強会（プロジェクト）をこれまで3回実施している。

法制定をうけた行政の担当部局のあり方、これまでの同和問題・人権問題としていた部落差別の呼称問題、そして、県条例や実態調査のあり方や手法の問題等さまざまな課題について、検証・議論をすすめている。そのなかで私たちが提案しているのは、この「推進法」が成立した経緯がなんであるか。一昨年の11月東京で開催された「人権フォーラ」が大きな要因になっている。いわば「オール和歌山」とりわけ県行政と部落解放同盟がその中心となってきたことをふまえ、その責任を果たすべきではないのかということである。

小委員会のなかでも議論されていた、差別をなくしていく財源の問題も含め一歩すすんだ議論が必要となっている。そして、再開された「部落問題にかかわる小委員会」が今後も開催される予定となっている。この「小委員会」に県選出国会議員の出席を求め、委員会での発言を促していくことが重要である。

5月22日に東京で法制定を求める中央集会が開催される。具体的な差別をとおして県選出の国会議員に働きかけをすすめていく必要がある。

そのためにも、この「推進法」を全同盟員で学習し、さらなる法制度実現にむけて闘いを前進させていく必要がある。

子ども・子育て会議で実態を訴える

和歌山市子ども・子育て会議が2月15日、和歌山市勤労者総合センターでひらかれ、16人の委員が参加した。

①幼保連携型認定こども園の認可について、②特定教育・保育施設の利用定員について、③和歌山市子ども・子育て支援事業計画の進捗状況について、3つの議題のうち、支援事業計画の進捗業況について、多くの委員から意見がだされた。なかでも、延長保育の充実について、利用者が増えれば実施個所数を増やす必要があると市から報告されたが、ニーズはあるが延長保育実施数が少ないため、パート労働でしか働くことができない。さらに、私立の保育所で短時間保育は考えられない。保育士数が少ないと市から報告されるが、潜在保育士が保育業務に戻らない理由は、パートや臨時でしか採用しない和歌山市の問題だと厳しい意見がだされた。さらに、病児保育事業にかかわって、市内に1か所しかないことに疑問。杭ノ瀬保育所に病後児保育はあるが、利用しにくい。保護者の声をしっかりうけとめ、ニーズにあった事業実施を強く求める委員の声があった。子どもの数の減少に歯止めをかけるなら、保護者の声は重要との意見があった。

文化の窓

「自閉症の僕が飛びはねる理由」

著者：東田直樹
発行：角川文庫　発行日：2016年6月18日
ISBN978-4-4044001506

「僕は、伝えたいのです。自分が何を感じ、考えているのかを」

自閉症の著者が記したこの一文には、すべてが凝縮されています。ひとりでも多くの人に、この一冊をお送りします。豊かな心のようすを知って下さい。

◆お問い合わせは県連・教宣部まで
TEL 073－473－2301